

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	研究者にとっての論文十ヶ条
別タイトル	Ten Commandments for researchers
作成者（著者）	杉山, 篤
公開者	東邦大学医学会
発行日	2020.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 67(1). p.1 2.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019_056
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD12286962

研究者にとっての論文十ヶ条

杉山 篤

学校法人東邦大学産学連携本部本部長

東邦大学医学部薬理学講座教授

『研究者にとっての論文十ヶ条』(以下 十ヶ条)を、東邦大学医学部薬理学講座(以下 当講座)の入口に5年前から大きく掲示している。北海道大学名誉教授で地球化学者であった角皆静男先生(2015年12月8日ご逝去)の言葉である。研究分野は異なるが、当講座が目指す方向に合致している。当講座を訪問する多種多様な分野の専門家や企業経営者がこの十ヶ条を感心して熟読している姿をよく目にする。あらゆる分野に通じる指針なのだろう。本巻頭言では角皆静男先生の十ヶ条に、大変僭越ながら私個人の解釈を加味して紹介する。

第1条 書かれた論文は書いた人の研究者としての人格を表す：医学部の学生には「出席偽装は、論文捏造・カルテ偽装・診断書偽造のはじまり」と注意を促している。論文捏造は本人や当該講座に止まらず、大学ひいては日本全体に年余に渡る悪影響を与える。

第2条 データのみ出して論文を書かない者は、テクニシャンである：早めにテクニシャンに転向していればもっと本来の力を発揮できたかもしれないと後で気づいても手遅れである。学会発表だけで論文を書かない状況を漫然と許している講座責任者にも責任がある。

第3条 データも出さず、論文(原著論文)を書かない者は、評論家である：実際は「評論家」ではなく「評論家もどき」である。論文を書け(か)なくなった時が潮時である。

第4条 研究者は論文を書くことによって成長する。また、成長の糧にしなければならない：論文を書くことにより、導ける結論の範囲が明確になる。査読者の厳しいコメントは同じ轍を踏まないための貴重な教訓である。論文を書き成長するためには、質の高い論文を出し続けなければならない。

第5条 論文は研究者の飯のタネである：昇進に必要な数・質の論文を執筆していなければ選考の土俵にすら上がれない。特に自分の論文の質を自分で評価できることが重

要である。

第6条 論文は後世の研究に影響を与えなければならない：影響力は後世の事情で決まるので、少なくとも後世まで存続する雑誌に掲載されなければならない。引用回数が重要な指標になるはずである。

第7条 研究者は書いた論文に責任を問われる：未熟さ・不勉強で間違えた場合は、たとえ大学院生であっても責任を取らねばならない。

第8条 忙しくて論文が書けないというのは、言い訳にはならず、能力がないといっているのと同じである：論文を書け(か)ない者は必ずこの言い訳をする。課題を理解できていないから書けないことに本人は気づかない。

第9条 博士論文以上の論文を書けない者は、その博士論文は指導教官のものといわれても仕方がない：そう言われて納得できない者は、いざとなれば自分の力だけで現在の科学水準に見合う論文を書けると信じて疑わない。

第10条 研究において最も重要なのはアイデアであり、それが試されるのが論文である：思いがけない論旨の展開を目にすることは大変良い勉強になるし、そのような経験をさせることも成長を促す良い方法である。また、ネガティブデータから意義ある論旨を絞り出せることも研究者に求められる能力である。

2014年度途中から角皆静男先生の十ヶ条を当講座の研究活動指針にすることにした。その結果、当講座の英文原著論文数は、2010年度4報、2011年度3報、2012年4報、2013年度4報であったが、2014年度より7報、2015年度9報、2016年度17報、2017年度15報、そして2018年度には22報と増加した。当講座に所属する(した)講座員全員の努力の賜物である。研究活動は競技スポーツと同じでベストを尽くすのは当たり前で、それでも勝てないことがある。それゆえ、働き方改革を日常業務に取り入れるのは良いとしても、同じ感覚で研究活動を捉えている者を見ると個人的にはがっかりする。そのような者は何年経って

も単独で国内外の研究者に伍して戦えるはずがない。令和元年最後の日、自分に言い訳をしないで過ごそうと新年からの思いを新たにする。本緒言が東邦大学医学会の2020

年以降の研究活性化にわずかでも寄与することを期待する。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2019-056